

音楽大学図書館における視聴覚資料の現状 —音楽大学生の図書館利用に注目して—

宮沢 明里

再現芸術である「音楽」を学ぶ音楽大学生にとって、誰かが演奏した音源を聞くことができる視聴覚資料は、演奏・作曲・音楽学・音楽教育のいずれを学ぼううえでも重要な資料となる。そのため、これまで音楽大学図書館では図書と同じくらい力を入れて視聴覚資料の収集が行われてきた。しかし現在は、視聴覚メディアの多様化やレンタルショップの拡大、音楽系サブスクリプションサービスの登場などを受け、学生から見た音楽大学図書館の視聴覚資料の有用性や、音楽大学図書館が視聴覚資料を収集する意義が変化しつつある。

本研究では、現在の音楽大学図書館における視聴覚資料の所蔵状況や価値について現状把握を行うとともに、視聴覚資料を含め、音楽大学図書館の資料を今後どう提供していくべきか検討することを研究目的とする。

調査方法としては、音楽図書館の視聴覚資料に関する文献を元に、現在に至るまで視聴覚資料の扱いがどう変化したかを明らかにしたのち、音楽大学図書館の所蔵データを分析して視聴覚資料所蔵状況の把握を行った。その後、利用者である学生へのインタビューと図書館で働く職員へのインタビューを行い、音楽大学生の情報利用や図書館利用、視聴覚資料に対する意識を明らかにし、今後検討すべき課題などを探った。

文献調査では、1980年代から1990年代にかけて視聴覚資料が図書館に根付き、メディアの多様化に対応しながら所蔵数を伸ばし、同時に図書館員は取り扱いについて積極的に議論や研修を行っていたことが明らかになった。また所蔵調査では、利用者の減少や各種サービス等の台頭を受けてもなお、音楽大学図書館では視聴覚資料の規模が縮小していないことが判明した。インタビュー調査からは、現代の音楽大学生は図書館所蔵の視聴覚資料ではなく、手軽さを求めて YouTube や Naxos のような時間や場所を問わずに利用できるサービスを利用することが多い、という結果が明らかになった。また、音楽大学生の図書館利用に関して、教わった内容以外には興味を持ちにくく、自分が利用する資料・サービス以外の存在を知らぬまま図書館利用を続ける学生が多いという特徴が明らかになった。

以上の内容を踏まえ、今後は視聴覚資料を含めた図書館資料の存在や活用法を、学生に対して積極的にアピールすることが課題であると結論付けた。また、インタビューの回答を元に、現代の音楽大学図書館における視聴覚資料の意義について考察した。図書館の視聴覚資料には、優れた音質や付属品が持つ価値など、パッケージメディアならではの様々な利点がある。また、Naxos などのサービスで利用できる音源の数には限りがあり、全ての音源を利用・保存することはできない。現代の音楽大学図書館が行っている視聴覚資料収集は、学生が触れることの出来る情報を増やすだけでなく、音楽分野において学術的な価値を持った資料を保存するという役割を担っていた。

(指導教員 逸村裕)